

虚実とりまぜた誇張癖（前編）

「フライの道具？・・・ああ、僕が行ってた釣具屋に、フライ用品も置いてましたよ！」

即座に所在を確認すると、私の住まいから程近いところであった。

（ホンマにい？・・・こんなところにあったんかいや！）

早速、週末の休みに出向いてみる・・・

（まずは釣具屋・・・って・・・あれか！）

聞いた話では、ごく普通の釣具屋の二階に別の店があり、そこがルアー＆フライ専門店とのことだった。

勇んで釣具屋に飛び込み、二階に上がるべく階段を探したが・・・ない・・・どこにも階段が見当たらない。

私「あのお・・・二階はどやって上がりますん？・・・ルアーとフ（ライ）・・・」
店「出て横の階段！」

カウンターに立つ親父さんは私の言葉を遮る様に定型機械的に言葉を発した。

察するにこの様に飛び込んで来る迷惑客に、もはや嫌気を通り越して諦めた日常となっていたんだろう。

已む無く追い払われる様に店を出る。

（横？・・・って、これか？）

「別の店って・・・こう言うことかい！」

見ると釣具屋を出た脇に、人ひとりが何とか通れる様な狭い急な階段が二階へと続いている。

（何か・・・めっちゃ怪しいし！・・・ぼったくりスナックみたいやし！）
生唾を呑みこみ、財布を取り出して所持金を確認した。

（三万とちょっとかぁ・・・なんとかなるやろ！）

不可思議に思われるかも知れないが、当時フライ用品を扱うプロショップはどこもかしこも常連客のみが集う店で敷居が高く、一見さんのド素人が入って行ける様な雰囲気ではなかった。

戸口を開けて一度足を踏み入れると、店主や常連客にあれこれ言い包められて何かを買わねば出させてもらえず、入門者の洗礼としてぼったくられる様な気がしていたからである。

私自身、正直この辺りが億劫な気分ではないと考えていた。

出張でラスベガスに放りだされ、無謀にも言葉も分らぬままカジノに向いてルーレットやバカラのテーブルに座ったこともあった。

しかし、それを踏まえてもこれらのプロショップに足を踏み入れるのは無謀を越えた禁断の領域として躊躇っていたのも事実である。

今から思えば、他愛無い笑い話で恥ずかしい・・・

（三万でロッドとリールとライン・・・までは無理かぁ？・・・）

「ロッドぐらいは買えるやろぉ・・・」

そう考えながらも、なかなか階段への一歩が踏み出せない。

すると、見上げる階段を中学生がルアーロッドを持って降りてきて、歩道の脇に止めてあった自転車に乗って軽々しく去って行った。

（フッ！・・・笑うし！・・・あんなガキでも大丈夫なんや！）

財布を仕舞いこんで一気に階段を駆け上がり、左に曲がってショップに入った。

何の事はない・・・それまで通っていたルアーショップと大差なくホッと胸を撫で下ろした。

店内の大半はルアーで埋め尽くされていたが奥にガラスケースのカウンターがあって、その隅に喜劇役者の伊東四朗と天才バカボンを掛け合せた様な初老のマスターが鎮座している。

そのガラスケースの半分とカウンターの向こう側の壁二面に憧れのフライ用品が陳列され、雑誌でしか見たことがなかったORVISのベストが飾ら

れていた。

流石にいきなりマスターに詰め寄ってフライの話をつけるのは気が引けて、一通り店内を歩き回ってみた。

(おっ！サラマンダーあるし！・・・おっと！トビーやん！)

やがて、これらのスプーンを2個程手にして、マスターの前に差し出した。

マ「・・・はい」

立ち上がられてレジに進み精算し始めた頃に話しかけて見た。

私「フライを・・・やって見たいなあ・とも思っくんやけど・・・」

マ「?・?・?」

私「どの辺りから・・・」

マ「・・・そお・言われてもお・・・どんなトコで釣らはんのお?」

私「特にココって決めてないんやけど・・・管理釣り場とかあ・・・」

マ「ああ・それやったら・・・」

私「溪流とかあ・・・できれば・・・バスも・・・」

マ「そらあ・難しいっちゃうか・・・贅沢な注文やでえ・(笑)」

それからマスターの講釈が始まった・・・内容は割愛するが、当時売られていた教本の請売りとも言える「あれも居る・これも居る」と言う内容だった。

しかし、何よりも驚かされたのはマスターが説明に持ち出して見せてくれる品々の価格であった。

数万円以上が目白押し of ロッド・・・単純な構造の太鼓リールに二万円以上の値札が張られている。

それに、ルアー時代は消耗品と考えていたラインが数千円で、差し出されたアルミのフライボックスも想像を絶する価格であった。

(これにまだ毛鉤買わなアカンやろ・・・)

ルアーを始めた頃も、最初に大きな出費となったのは、満足行く釣りを

行う為のルアーの買い揃えである。

フライフィッシングに置いて同様と見えて、その出費分も合わせて計算すると、ひと月の収入を上回る金額であった。

(アッカン・・・ナンボ程金掛る釣りやねん?！)

マ「・・・と、言う感じかな?」

私「はあ・・・(絶句)」

マ「まあ・・・最初から全部そろえるのは大変やけど、最低限、あれとこれ・」

私「もうエエしーそんな金無いしー」

マ「・・・にコイツとアイツだけは居る・・・ああ、これもか!・」

私「・・・」

マ「これらは居るなあ・・・皆、最初は金掛けてはりますわ! (笑)」

私「・・・(はあ)・・・」

そこに電話が掛って来た。

マ「ちよっとスンマセン・・・」と電話に駆け寄られた。

私「ちよと、考えて・・・また来ますわ!」

マ「ああ・・・ゴメン!・・・また気軽に来て頂戴! (笑)・」

私「おおきに・」

マ「はいどおも!・・・(もしもしい・・・ああ)」

階段をゆっくり下りて店の外に出ると、ドッと疲れが湧いてた。

(三万円じゃ・・・話にならんやん!)

しかし、こんな事でフライを諦める気にはなれない。

その直後、東京出張でたまたま手にした本に、それまでの教本を否定して単純明快に入門タックル類が記されていた。

①入門に際してロッドは一本でいい!

②硬めの5番を選び!・長さは8フィート・素材はカーボンがベスト・

③最初のラインはウェイトフォワードのフロートティング!

④リールは国産の安物で充分！

「この本に書いたあゝる通りでアカンかったら諦めよかぁ・・・」

私としては、この内容を裏付ける形でマスターによる補正も含めて最初のタックル類を揃えたかった。

週末を待って勇んで出向いてみたものの・・・

マ「そんな断定できる様な簡単な釣りじゃないまっせ！(笑)・・・」

私「そうなんですか？」

マ「ルアーでもミディアムロッド一本で何でもできると思わはるう？」

私「・・・確かにそうやけどぁ・・・」

とにかく、最初の一本を納得行く形で揃えたい。タックルを揃える前から、溪流か？管理釣り場か？湖沼か？鱒か？バスか？決め打ちするのも難しい。

マ「もうチョイ対象絞らんと無理無理(笑)」

そして既知のルアー釣りを引合に出しながら、約2ヶ月程「この店に通い詰め、漸くマスターとも打ち解けてそれなりの答えを引き出した。

私「8フィートの#5やったら・・・とりあえず何でもできるんちゃうん？」

マ「確かに自分が言う事も正しいな・・・」

私「そうやろぉ(笑)」

マ「最初の一本は8フィートの#5で行けるわ！」

私「そう言ってもらったら自信もてるわ！(笑)」

マ「直ぐに#3欲しなと思うけど(笑)・・・」

私「それやったらこのロッドお？」

マ「最初やったらこれにしときはあるう？・・・言うたら売れ残りやけど？」
斯くして、漸く待望のフライロッドを手に入れた。

それからこの「マスターの店」に完成品のフライを求めて足繁く通い込

み、あれこれ色々と刷り込んでもらいながら、なんとか魚を手にする段階まで漕ぎつけることが出来た。

そしてその年の溪流シーズンを迎え、完成品のドライフライを買い求める為に自分のフライボックスを片手に「マスターの店」に押し掛けた。

この頃になると、管理釣り場のアトラクター類は既にマスターの手解きを受けて、自分で毛鉤を巻く様にはなっていたが、ドライに関しては未だ未開の域で、この日の夕方に毛鉤を買い求めてそのまま夜駆けして溪を指す予定だった。

私「ロイヤルコーチマン#14・・・何個居るかなあ？」

マ「溪流行くんか？・・・」

私「うん！」

マ「そんなん買わんと自分で巻きいゝや！・・・」

私「難しそぉやん！」

マ「タイミングツール買おつたんやし・・・頑張らんかいや！」

私「今から行くねん・・・また今度！(笑)」

マ「白か黒が見やすいで！」

「この言葉に後押しされて、ホワイトミラーやブラックナットをチョイスし、著名なアダムスに茶色のマーチブラウン等、十個程をトレイに入れてカウンターに差し出した。

私「これに入れてエエよ！」

そう言っただけでフライボックスを差し出した。

フライボックスと言っても、今なら百均で売られている様なプラスチックケースである。

マ「なんやこれ？」

私「ワシのフライボックス！」

マ「もうちょっとマシなん使いゝな！」

私「あんなアルミの高いのん要らんし！・・・」

マ「アルミと違おてプラチックや!・・・」

私「プラチックの奴やったらこれで充分やん!」

そんな私の主張を無視する様に、マスターが一つのフライボックスをカウスターの上に差し出した。

マ「せめてこれぐらい使おたりいくな!・・・軽うくてエエでえ!」

散々アルミボックスの「手に馴染む重さに品がある」とか何とか講釈していたにもかかわらず、今度は「軽さが良い」とおっしゃる。

この頃になると、マスターの言われることがどこまで真実でどこからが商売自当てのセールストークなのか?が今一つ掴めずにいた。

しかも、語り出すと止まらぬ性分らしく、熱が入ると「虚実とりまぜた誇張癖」とも取れて、ある程度差し引いて受け止めないと馬鹿を見る様な気がしてならなかった。

私「なんぼなん?」

マ「千五百円・・・」

私「たっかあゝ・・・負けてえゝな!」

マ「ケチ臭いこと言わんと買おゝときて!・・・」

私「・・・」

マ「まあ、今度お金がある時でもエエけど!」

しかし、一度フライが入った現物を見せられてしまうと雰囲気は全く違う・・・この辺り、マスターは客人が買わずに要られない方向に誘い上げるのが上手かった。

私「ホンマ軽いなあゝ・・・」

マ「そおゝやろお!・・・エエやろ!」

私「これ、プラチックちゃうやん!セルロイドやん!・・・」

マ「あっ・・・そおやな!・・・セルロイドや!」

私「こんなん直ぐ割れるし!」

マ「大丈夫やて!・・・ドツいたり踏んだりしたらアカンけど!・・・」

私「ホンマあゝ?」

マ「普通に使おとつて割れることなんかないわ!・・・」

私「嘘おやあん?」

マ「プラチックより強いんちゃうか?」

私「ホンマあゝ?」

そう言つて手に取つて蓋を開け様とするが、なかなか開かない。

私「固あゝ!・・・開けへんし!」

マ「貸してみい!・・・この辺り軽うく押さえんねん!・・・ホレ!」

私「エゝ?・・・こおかあ?・・・ちゃうちゃう!」

程なく、【バァン】・・・と大きな音を立てて蓋が開き、中の毛鉤が踊り狂った様に零れ落ちる。

拾い上げてボックスに入れ、もう一度やり直す為に閉め様としたが、今度は固くて閉まりにくい。

やがて、【バン】とこれまた大きな音で蓋が閉まり、毛鉤がボックスの仕切りの中で音を立てて跳ねまわった。

私「固あゝ!・・・」

マ「それ(私のチープなフライボックス) なんかのプラチックは、蓋にパッチン(蓋を止めるパーツの様なもの) 着いとるやろ!・・・それ直ぐにちぎれてまうでな!」

私「まあ、そんなもんやろお(笑)」

マ「その点、これ(セルロイド製) はパッチリしまつて潰れるトコなんかあらへん!・・・ワシの長年の経験やったらコイツが一番やな!」

私「こないだは、あのアルミが一番つて言うてたやん?(笑)」

マ「あれは【品格の充実感】で一番・・・これは【機能的】に一番・・・」

私「上手いこと言つてえからに・・・」

マ「ホンマやて!・・・使おたら分かるわ・・・」

結局、そのフライボックスはそのまま袋にも詰めずに手渡され、精算して店を出ると車の後部に吊るしたベストのポケットに仕舞い込まれた。

翌朝、溪のほとりでラインをセットしティペットを継ぎ足した後、ポケットからフライボックスを取り出す。

【Maven】と記された透明の蓋を透して、昨日購入したばかりのドライフライが出動の機会を伺っている。

もう気分は最高・・・しかし、こんな状況で失態をしでかすのが毎度の事・・・生まれながらの私の持ち運なのかも知れない。

蓋が開かない・・・

(あれ?・・・どうやったけ?)

サッパリ開かない・・・

(固あゝ・・・どっ押さえるんやったけ?)

程なく・・・【バァン】と大きな音を立てて蓋が開き、中の毛鉤が踊り狂った様に零れ落ちた。

(あゝゝ・・・ロイヤルコーチマン流れてった!・・・)

「待て待て!・・・あゝあ!」

失態の生贄となって白泡にもまれて消えたロイヤルコーチマン・・・

「最初にアイツ結ばお思たのにいゝ・・・しばいたるか!・・・ホンマ」

ひとまずホワイトミラーを結んで溪に降れる。

「あっ!・・・引っ掛かったし!」

杉の枝にホワイトミラーのお飾りを施して毛鉤の交換・・・

二度同じ事を繰り返す訳にはいかない。

万一毛鉤が落ちても大丈夫な平面陸地に屈みこんで、フライボックスを腹に抱え込んで開け様とした。

やはり、開かない・・・固い・・・息を止めて精神を集中させて見る。

程なく・・・【バリーツ】と大きな音を立てて蓋が開いた。

・・・が、何かがおかしい。

(あっ!・・・うっそおゝ!・・・蓋割れてるし!)

「あのおっさん!・・・何が割れへんじゃ!・・・ホンマ!・・・あゝあ!・・・」

無惨にも左隅のコマ部分の蓋に、1センチ程ヒビが入ってしまった。

その日の釣りはその後どの様に展開したのか全く記憶に残っていないが、この時の落胆だけはしっかりと記憶の底に張り付いている。

私「こないだのフライボックス割れたし!」

マ「なんでえゝ・・・どっかぶつけたん?」

私「蓋開けよう思おたら、割れたし!・・・ホレ!」

マ「割れたって・・・これ自分が割ったんやろ!・・・」

私「ちやうちやう!・・・」

マ「・・・開け方、教えたったのに・・・ホンマ・・・」

そう言われても、簡単に納得できるものではない。

新品に交換するか返品できないかを持ちかけ様と話を切り出すタイミングを伺っていた時・・・

マ「これで大丈夫や!」

差し出されたフライボックスは何とセロテープで補修されている。

(これで大丈夫って・・・そう言う問題とちやうやろ!)

余りにもあっけらかんと差し出す見事な対応に絶句していると、またもやマスターの講釈が始まる。

(ホンマ敵わんし!・・・このおっさんには負けるわ!)

無惨にも割れて補修されたフライボックスの蓋を開け閉めしながら、マスターの講釈が終わるのを待つ・・・

何処までが真実でどこまでが虚偽誇張なのかさっぱりわからない。

それから、このマスターの「虚実とりまぜた誇張癖」を勘案しながら、許される消費の全てをこの釣りに注ぎ込んで行った。

後編につづく

あとがき

この初回でケチがついたフライボックスはその後どうなったか？

当然、その後プラスチック製のフライボックスに即刻乗り換えた。

しかし、気が付くとこのセルロイド製を溪に持ち込んでいる。

・でも、やはりこのフライボックスを我慢して使用すると、このセロテープの補修後を見る度に嫌になり、忌々しくてならない・・・

・・・と言うことで、再びプラスチック製に乗り換える。

・・・で、また気が付くと結局このセルロイド製を溪に持ち込んでいる。

それから十年程、この様な状況が続き、目の前を様々なフライボックスが通過して行った。

ところが腹立たしいことに、このセルロイド製のマリエットは今尚顕在である。

やはり、実用機能面で・・・私としては抜群に相性がよかった。

当然、今現在は同類後継の3兄弟(3箱)に現役の座を譲ってはいるが、多種を溪に持ち込むと決めた場合は4個目のセルロイドボックスとして老骨に鞭打つ状況で担ぎ出されている。

そして今振り返ると、ハックルタイプのドライフライボックスは・・・

「アルミ製は【品格の充実感】で一番、セルロイド製は【機能的】に一番」
・・・とマスターが講釈された通りの状況に落ち着いている。

これも実に腹立たしいが、このフライボックスにまつわるマスターの講釈は【虚】ではなく【実】であったと認めざるを得ない。

そして、あれだけ忌々しく思えたセロテープの補修後も、歳月を重ねる間に懐かしい思い出を物語る痕跡となって、愛着を感じる様になってしまった。

このフライボックスを手にとると、微かに染み込んだ若かりし頃の情熱が、仄かに掌に伝わってくる様な気がしている。

2010年 初秋

